

ホームレスの側から
伝えたいこと

相川 太郎さん(仮名)



私は、ホームレスとなって7年目になります。20歳頃までは出生地で過ごし、その後東京で長くトラックドライバーをしていました。50代の頃、体力の限界を感じ辞めてからは、さまざまな仕事をしてきました。土木系の人材派遣会社で、現場責任者である番頭役となりましたが、約束した給料がもらえず、仕事場を飛び出し、貯金もあったので車で観光地を転々とししました。お金も底をつきかけた時、トラックドライバー時代の同僚と今いる市で偶然出会い、彼がホームレスだったことがきっかけで、路上生活が始まりました。

木材で作った、雨露を凌げる程度の寝床での生活は、人の生活する場所とは言えません。仕事をしたくてもチャンスがありませんでした。

生活費は、資源ゴミ回収で得ます。アルミ缶1キロ約100円、回収日には30キロ集めないと食べることも難しいのです。経済不況時には業者の引き取り額が1キロ30円という時もありました。

生活保護を受ける権利はありますが、72歳の今でも足腰動き働くことができるうちは、利用するにも抵抗があります。

周囲にその土地の人はいなく、大都会から仕事を失った人が流れ着いて生活しています。人間は失敗したって良い。ただ、本人が立ち直れる支えが必要です。一匹の魚を与えるよりも、「魚の釣り方」を教えた方が、本人のためになると私は思います。

※(社)神奈川県社会福祉士のホームレス巡回相談を通じてご紹介いただき、聞き取りした内容を掲載しています。

と思っています。面接の際には、そうした思いを引き出しながら、働き方の選択肢を広げる工夫をし可能性を探っています。現在、はまかせには二十代から七十代まで幅広い利用者がいますが、若年層は社会経験が乏しいことから、人間関係の作り方や社会人としての基本的な生活の仕方などが身に付いていないことも多く、就労するまでの支援に特に配慮が必要となっています」そう話すのは、就労支援専従員の光永昭雄さん。

一方で、就労した後の課題もあると言葉を続けます。

「就労した段階で自立したとみなされ、退所しなければならぬため、支援者とのつながりも切れてしまいます。その後は、本人の自助努力で何とかしなければならぬというのが現状です。ホームレスとなったことを知られたくないという気持ちなどから、家族との関係や、それまで持っていた地縁関係なども途切れてしまっていることが多く、頼れる相手もない状況です。また、環境の変化による戸惑いを抱えながらの生活によって、就職できたのに早期退職してしまい、行方が分からなくなってしまう方もいます」

尊厳を守り孤立を防ぐために

仕事を得るだけでなく、その後の自立をどう定着させていくか。

はまかせでは、この課題の解決に向けた取り組みを行っています。「退所した利用者」と定期的に連絡を取り合うことや、OB会の企画を検討するなど、つながりづくりを意識しています。こうしたつながりを持てる場を、社会の中に広げていく必要がある」と久保田さんは結んでくれました。

取り組みを通して見えてきたのは、家族や職場、社会のいずれにも属することができない厳しい状況

況の中にあっても、懸命に生きようとする人がいること。また、制度やサービスなどの社会資源がいまだ十分でない中であっても、一人ひとりの人生を見据えた「自立」の有り様を大切にし、懸命に支援にあたる関係者の方々の存在があるということでした。

雇用や働き方だけでなく、人が互いに尊び合い、支え合う人間関係をどう再生していくか。関係者やNPOなどによる活動だけでなく、広く社会全体で解決を目指すべき課題として考えていく必要があるのではないのでしょうか。

(企画調整・情報提供担当)